
令和元年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業

実施報告書

教職員のいじめの認知力や対応力等の向上、児童生徒の社会性の育成及び学校、家庭、地域におけるいじめ防止の意識の醸成を図ることを目的に指定校が取り組んだ実践をまとめたものです。

＜事業実施校＞

上 越 市 立 大 潟 町 小 学 校

上 越 市 立 春 日 中 学 校

糸 魚 川 市 立 糸 魚 川 中 学 校

長 岡 市 立 富 曾 亀 小 学 校

小 千 谷 市 立 片 貝 小 学 校

十 日 町 市 立 田 沢 小 学 校

燕 市 立 燕 中 学 校

佐 渡 市 立 加 茂 小 学 校

聖 籠 町 立 亀 代 小 学 校

新 発 田 市 立 第 一 中 学 校

新潟県教育庁生徒指導課

学校名 上越市立大潟町小学校

1 取組の実際

昨年度は、6年児童において指導の困難が生じた1年であった。数々の問題行動への対応を丁寧に行ったものの、教師を疲弊させると同時に、子ども自身がそうした問題の解決から目をそらすという状況へと陥った。そうしたことの背景には、子どもの人間関係づくりの能力の欠如、ゲームを主とするメディアへの依存等があり、不満やイライラ感を抱えながら学校生活を送る子どもが非常に多い現実を生み出している。こうした背景を踏まえ、「教師－児童」間の関係を再構築することを目指すと共に、子ども自身が主体的にいじめ防止に取り組んでいく学校を具現化するために、次のような取組を進めた。

(1) 「学級づくり」に向けた職員研修の実施

- ・8月19日 新潟薬科大学 橋本 定男 先生
- ・「本当に温かい学級は、問題解決力のある強い集団」であることを学び、特別活動の充実を視野に、次学期の経営方策を立て直すことができた。

(2) 研修会への派遣

- ・10月5日「いじめ・学校事故などにおける事実の探究 起きたことを子どもが話すのをアシストするには～フォレンジックインタビューから学ぶ～〈基礎編〉」受講
- ・受講者は研修内容をレポートにまとめ、伝達講習を行った。いじめ対応の一手段として、子どもの話の聞き方について、教師自身の「クセ」を見直すことができた。

(3) 「いじめを許さない、見逃さない」ための子ども発の活動

- ・友達のよいところや頑張っていること、してもらってうれしかったことを書き、交換する「ハッピーカード」の活動に全校で取り組む。
- ・児童会総務による標語の募集や、ポスターの作成と掲示による啓発活動により、子どもの「いじめを許さない意識」の醸成を図った。
- ・中学校区「潟中さわやかスクール」に参加した6年生が、いじめ未然防止取組の活動を発表した。

(4) 「こころのポスト」による子どもへの寄り添い

- ・教師が子どもの声により耳を傾けるために、自由投函によって子どもに悩みや困りごとを話すことのできる場を提供する。家庭でも、「こころのポストで伝えてみたら？」と保護者が子どもに勧めるエピソードも生まれた。

(5) メディアと人権に関する啓発

- ・12月5日 保護者啓発のための講演会 上越教育大学 清水 雅之先生
- ・自学級の実態に応じて、メディアと人権に関する教材研究を進め、授業実践を公開した。

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

【児童】児童間での多少のトラブルはあるにせよ、全体的には落ち着いて学校生活を送っている。保護者から見た子どもの姿として、2学期の学校評価アンケートにおける質問項目では、1学期と比較して次のような上昇傾向が見られる。

*「子どもは、友だちと仲よく過ごしている」90.9%（+2.5）

＊「子どもは、友だちの気持ちを考えた言葉遣いをしている」72.5% (+3.0)

＊「子どもは、嫌なことをされたり、言われたりして困っていない」

80.9% (+8.3)

【教職員】いじめが起こった時の対応をどうするかという指向性から、いじめを許さない子ども集団をつくるために何をすればよいのかという意識や関心へと変容した。その柱として特別活動を重視し、研修で学んだことを生かしながら「学級づくり」に取り組んだ。また、子ども主体の活動の意義をしっかりと理解し、業務改善が求められる昨今ではあっても、新たな取組に積極的に取り組んだ。

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

《「ハッピーカード」の取組》

友達のよいところ、がんばっていることを伝えるカード交換の活動を全校体制で取り入れる。学級内だけでなく、日頃から取り組んでいる異学年集団活動を生かし、他学年の友達からもカードをもらえるように工夫した。カードを受け渡しする、子どもの嬉しそうな表情が印象的であり、互いに認め合うことの価値を実感する子どもの姿である。この取組のよさは、互いのよさや頑張りを認め合う雰囲気学校全体に生み出すことにあり、他者と認め合う雰囲気づくりをしていく活動自体が、いじめの未然防止につながっていった。

《「こころのポスト」の取組》

投函した内容は「校長先生と教頭先生が読む」ということを、全校で共通理解をしておく。管理職は、投函内容をもとに、子どもに直接話を聞いたり、投函した子どもに寄り添っていくよう担任に伝えたりする。全職員で、子どもたちの声に耳を傾けていくことを積極的に行っていくことで、トラブルへの対応が早期に進む事案も多くあった。また、担任が子どもの問題を抱え込んでしまうことを防ぐ抑止策ともなり、組織的対応力を高めるきっかけとなった。

②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

当資料でも述べられている、「保護者との連携」「情報モラル教育の推進」を積極的に進めるために、「情報モラル」に関する授業を保護者に参観してもらうことと、保護者啓発の講演会を同日開催した。教師は授業展開や教材教具を工夫し、児童がメディアに関わる自分自身を振り返り、今後の生活改善について考えることのできる授業に取り組んだ。保護者はそれを参観することで、わが子の実態を知ることができた。講演会では、清水教授から「当校の実態分析」についての話をいただき、保護者への警鐘となった。参加した保護者にもたいへん好評であった。

3 課題

「いじめの未然防止」を今後も積極的に行っていくためには、今年度の取組をきっかけとして、来年度以降も、その取組を継続・発展させていき、“本事業のための取組”で終わってはならない。

特に保護者との連携は大切にしていきたい。いじめが起きた際の対応については言うまでもないが、「学校いじめ防止基本方針」をもとに、「未然防止」という点でどのような連携を進めていくか、保護者と共通のビジョンを創り上げていく必要がある。

学校名 上越市立春日中学校

1 取組の実際

本校では、学校生活の改善に向け、特別活動の充実を基軸に据えて社会性の育成に努め、全体としては落ち着いた状態を保つことができています。さらにここ数年、生徒の手による自治力を求め、個人としても集団としても問題解決力を身に付けることを教職員の目標としてきた。

(1) よりよい人間関係の形成を目指す集団づくり

- ・目的を明確にした話合いや学び合いの機会を取り入れた授業の実践
- ・学ぶ意欲や自信につながる課題提示、学習過程・形態の工夫

(2) 生徒が主体的に取り組む特別活動の推進

- ・学校行事を核とした教育期（がんばる期）の設定と期ごとに目指す姿の共有
- ・生徒が社会性を発揮する貢献活動等の場の設定
- ・生徒会が主体的に行ういじめ見逃しゼロ強調月間の推進

(3) 家庭や地域と連携した社会的スキルの育成

- ・地域で受け入れる職場体験活動や地域と一体となって行うあいさつ運動の実施
- ・春日地域青少年育成会議が行うまちづくりワークショップの活用

(4) いじめの認知力や初期対応力の向上

- ・生徒と向き合う時間の確保と毎月のいじめ実態調査の確実な見取り
- ・教職員やスクールカウンセラーによる教育相談の充実
- ・事例研修を核とした組織的な対応を学ぶ職員研修の実施

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

対 象	学校評価の質問項目	1 学期	2 学期
生 徒	私の周りでは、いじめなどがなく、楽しい学校生活をつくる努力をすることができた。	92.2 %	94.9 %
保護者	お子さんは楽しく学校生活を送っている。	91.3 %	90.3 %
教職員	いじめ問題撲滅に向けた教育活動に努めた。	100 %	100 %

（パーセンテージは、肯定的な回答の割合）

生徒を対象にした上記の質問は、「いじめ見逃しゼロスクール集会」を11月27日に開催した2週間後に回答したこともあり、肯定的な回答が大半を占めることになった。保護者の回答は数値が若干落ちてはいるが、依然として9割以上の方から肯定的な回答を得ている。

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

「がんばる期（教育期）」の自主的な活動を展開

「スプリングトライアルデー（春の遠足）」「部活動」「体育祭」「合唱祭」「いじめ見逃しゼロスクール集会」「卒業式」の6つの教育期では、生徒会執行部が全体の目標設定を行い、各学級でより具体的な活動目標を設定した。入学して間もない1年生の話合いでは、3年生がファシリテーターを務め、下級生が上級生を尊敬する「あこがれサイクル」をスタートさせる取組とした。

また、各期に2つずつ重点委員会を設定し、その期の目標が達成するための活動（学級自慢など）を展開した。



写真；3年生によるFGの様子

生徒会が主体的に行う「いじめ見逃しゼロ」の取組

上記にある通り、「いじめ見逃しゼロスクール集会」はひとつの教育期のまとめとして取り組んでいる。校区の春日小学校と高志小学校の5、6年生と一緒に、各校の取組やいじめ未然防止を啓発する標語の発表などを行っている。今年度は、歌う道徳教師として全国で活躍されている大野靖之氏を招き、ミニライブを開催した。

この集会の企画運営には、生徒会をはじめ各部門で有志生徒が積極的に参画した。多くの生徒が「お客さん」ではなく「自分たちの集会」として取り組んでいた。

②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

資料集の「学級づくり、集団づくり」の項で紹介されている『学級目標』を活用し、『クラスルール』を決めよう」を全学級において共通して実践した。

年度当初の学級開きに引き続き、学級目標づくりに取り組んだ。どんなクラスにしたいかだけではなく、より具体的なクラスルールを考えた。実際にでき上がった学級目標はもちろん、そのベースとなったルールは、1学期の終わりや2学期の体育祭、合唱祭の際に活用されチェックすることができ、自治の雰囲気醸成に有効に働いていた。特に、合唱祭の練習の場面において複数のクラスで、合言葉としてクラスルールを活用していた。



写真；学級目標を相談する様子

3 課題

今年度、些細なことで他者を傷付ける言動があったり、人間関係の稚拙さが誤解を招いてトラブルを起こしたりして、深刻ないじめに発展しかねない事例が複数発生した。また、発達障害等が疑われる言動が原因と考えられる事例も発生しており、個別に慎重な対応が求められる。

いじめの未然防止については、生徒が事例を自分事としてとらえることができるかどうか指導のポイントと考える。さらに、道徳の授業の場面で正しい善悪の判断を表現することができる生徒の中にも、自らの行動に反映することができない生徒がいる。実際に、より良い行動を取れるようSSTなど指導を工夫していく必要を感じている。

いじめの認知については、毎月のいじめ実態調査はもとより、教職員が日頃の生徒の生活実態を観察し、情報を共有した結果による発見が多い。さらに、当該生徒本人からの訴えも多く、生徒と教職員の人間関係の構築がいじめの早期発見・即時対応につながっている。

いじめを認知したのち、被害生徒、加害生徒双方への聴取に基づいて事実を照らし合わせたはずが、加害生徒が自分を守るために聴取時と異なる言い分を保護者にすることがあり、状況が混乱するケースがあった。これは、被害者の切なさを感じ取り、自己の過ちを真摯に反省しようとする気持ちの希薄な生徒が増加傾向にあることを示している。これまで以上に心情に迫る道徳教育の工夫が求められる。

近年、SNS上で誹謗中傷される、写真や動画を勝手に掲載される等のいじめを訴える事案が多い。インターネットに接続できる端末機器の所持率と通信経験率は90%を超えている。ネットトラブルを回避するための講演会や利用調査を適宜行い、生徒・保護者への啓発活動を継続していく必要がある。

令和元年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 糸魚川市立糸魚川中学校

1 取組の実際

当校では、学校全体にルールを守ろうとする雰囲気は広がってきた。しかし、生徒の普段の行動や様子を見てみると、生徒の意識は「言われたからやる」「怒られないようにやる」という受け身的なものにとどまっているという点は否めない。また、問題が顕在化しにくく、SNS 上など学校以外の場でトラブルが起こることが多い。さらに、自分の気持ちを上手に相手に伝えることができず、大人が知らない間に人間関係トラブルが深刻化して、不登校になる生徒も少なくない。

このような状況を考えると、教師主体で行う指導や対策には限界があると言わざるを得ない。そこで、生徒が自ら声を上げて学校をよくしていこうとする姿勢、自治の力を育みたいと考え、次の取組を実施した。

- A 生徒の主体性を重視した生徒会活動の推進
- B クラス会議の実践を通した、よりよい人間関係の形成を目指す集団づくり
- C 道徳授業や講話を通した、生徒が自らいじめがあることを報告しようとする人権意識の向上
- D 学区小学校や家庭、地域と連携した社会的スキルの育成
- E これからの自分について考え、自己有用感を高める講演会の実施

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

学校評価の集計より、生徒に以下の変容が見られた。昨年度と比較すると、①②③どの項目も変化はない。特に②の項目はここ数年高い評価が続いている。このことから、生徒はいじめをしてはいけないという意識は強く持っていると言えることができる。また、過去3年間の評価を見ると、①③の項目は年々肯定的評価が増えていることが分かる。特に、③の項目が増えているということは、「自治の力」が育ってきているととらえることができる。

①「学校にいじめや暴力はない」

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
はい	29%	46%	59%	60%
どちらかというとはい	24%	28%	25%	27%
どちらかというといいえ	29%	18%	13%	8%
いいえ	18%	8%	3%	5%

②「いじめは、どんな理由があってもいけないことだ」

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
はい	89%	89%	89%	89%
どちらかというとはい	9%	9%	8%	9%
どちらかというといいえ	1%	1%	1%	1%
いいえ	1%	1%	2%	1%

③「私の学級は、いじめやからかいに『やめろ』と言える」

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
はい	35%	51%	56%	56%
どちらかというとはい	37%	31%	31%	29%
どちらかというといいえ	22%	12%	11%	11%
いいえ	6%	6%	3%	4%

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

生徒の心を耕し、自分の将来について目標を持つことができるように講演会を実施した。生徒の感想から、「あきらめない気持ち」「主体的に取り組むこと」「思いやる心」「仲間の存在」等が大切であると感じることができたようである。

<講演のねらい>

将来の自分について考えることを通して、これまでの自分を見つめ直し、自己有用感を高め、主体的に行動する態度を育成する。

<講師・演題> 伊藤 伴 「夢を貫き通す強い意志」

14歳でヨーロッパアルプス最高峰モンブラン登頂。

2016年5月に20歳で世界最高峰エベレストに登頂。(当時、日本人最年登頂少記録達成)

生徒の感想

- ・周りの人に馬鹿にされても、強い意志があつてとてもすごいと思いました。自分だったらあきらめていると思います。これからは自分の意見を馬鹿にされても揺るがない気持ちを持っていきたいです。
- ・一步挑戦する勇気がある伊藤さんだからこそ、同級生やガイドさんに支えてもらい、頂上まで登り切ることができたのだと思います。仲間の大切さを知りました。

令和元年度学校評価前期後期の比較ア・イの結果、「自己有用感」の高まりや「協力」することの大切さを感じることができた生徒が多かったことが分かる。ウ・エからは、特に2・3年生で肯定的評価が増えたことから、これまでの自分、これからの自分について考えるができたのではないかな。

令和元年度学校評価前期後期比較

「ア. 自分には良いところがある」

	前期	後期
はい	55%	65%
どちらかというとはい	36%	27%
どちらかというといいえ	6%	5%
いいえ	3%	3%

「ウ. 最後まであきらめず取り組んでいる」

	前期	後期
はい	55%	55%
どちらかというとはい	34%	36%
どちらかというといいえ	9%	8%
いいえ	2%	1%

「イ. 誰とでも協力して取り組んでいる」

	前期	後期
はい	66%	71%
どちらかというとはい	29%	24%
どちらかというといいえ	4%	4%
いいえ	1%	1%

「エ. 将来の夢や目標をもっている」

	前期	後期
はい	53%	54%
どちらかというとはい	25%	26%
どちらかというといいえ	15%	13%
いいえ	7%	7%

②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

新潟県いじめ等防止のための資料集作成委員である橋本定男先生が提唱している「温かく強い集団づくり」の考え方を、職員研修や職員会議において教職員集団に伝え共通理解を図った。教師が頭ごなしに強い指導をするのではなく、寄り添う姿勢、支える姿勢を大切にした対応を徹底し、生徒の「自治の力」を育むための取組(A・B・C・D・E等)を行った。

3 課題

学校評価アンケートやhyper-QUの結果から、どの学年でもどの学級でも集団の高まりがみられた。これは、教師が支えるという姿勢を徹底し、生徒が前面に出て活動する場面が増えたことによって、生徒の自己有用感や生徒と教師の信頼関係が高まったからである。実際に、当校で今年度発生したいじめ問題や人間関係トラブルのほとんどは、当事者である生徒からの相談や、周りで見ていた生徒からの報告によるものであった。このように、安心して相談できる体制や自分たちの力で何とかしようとする生徒の「自治の力」が高まりつつある。

「教師が支える」ということは、手取り足取り教えて生徒に失敗させないことではない。生徒が挑戦する姿を見守り、失敗したときにそれを乗り越えようとする生徒を支えるということである。この学校の姿勢がしっかりと保護者に伝わっておらず、「なぜ学校は、失敗すると分かっている何もしてくれないのか。」という保護者の不満から、保護者と教師の関係が悪化することがあった。また、生徒が自分たちの力で解決しようとしているときに、保護者が生徒の前に出てきて、保護者同士がトラブルを起こし、問題を悪化させることもあった。生徒の自立を目指して生徒に任せる、その生徒を支え、応援する学校と保護者。生徒のために、保護者への理解を図り、学校と保護者の連携や信頼をより強めることが今後の課題である。

学校名 長岡市立富曽亀小学校

1 取組の実際

いじめの未然防止に向けて、当校では「互いの違いを認め・尊重しあい、かつ、たくましく活かしあう態度、能力の育成」が重要であると考えた。その基盤となるのは各学級である。「誰もが居心地のよい学級」を目指し、以下のような取組を進めた。

① インクルーシブ教育の視点から多様性を尊重する学級づくり

「誰もが居心地のよい学級」を目指し、学年の協力体制を基盤に、それぞれの学級づくりを進めるためには、各学級の人間関係を把握し、個に寄り添うとともに、具体的な方策を各担任はもつ必要がある。そこで後援会の支援を受け、これまでと変え Hyper-QU 調査を実施したことで、より多面的に児童の実態を捉えることができるようになった。夏季休業中、湯之谷小学校校長の伊佐貢様を講師に、第一回検査の結果分析の仕方や活用法について研修を行った。これを受けて、学年部で各学級の分析を行い、一学期の学級経営について評価し、二学期の方針を話し合った。多くの目でじっくりと検討することで、学級づくりにおいて具体策を講じることができた。11 月にも Hyper-QU 調査を実施し、学年部ごとに分析・今後の方策の検討を行うことで、PDCA サイクルの中で、学級の実態に応じた指導に生かすことができた。



多様な子どもの姿を理解するためには、保幼との連携と子どもの見立ての意見交換が重要な意味をもつ。そのためには、具体的な子どもの姿を通して子どものことを語り合う場や人間関係



の構築がポイントとなる。市内の幼稚園、保育園にも声を掛け、9 月、上越教育大学大学院松本健義教授を講師に、授業での姿や子どもの作品から児童理解を深める研修を行った。

総括研修として、12 月には、元筑波大学附属大塚特別支援学校地域支援部長の安部博志様を講師に迎え、市内の公立学校すべてにも声を掛け、特別支援教育の視点から多様な特性を持つ児童の理解の在り方や支援、一人一人にとって居心地のよい学級づくりについて、全学級の授業を参観いただき、各担任のこれまでの取組を評価していただいた。

② 縦割り班活動の充実

班活動が円滑にスタートできるよう、リーダーとしての意識付けや入念な準備を行った。班活動の前には、リーダーが集まり、活動のめあてを確認し、具体的な活動内容と役割分担を明確にした。当校では、日々の清掃活動、児童集会、運動会、遠足、児童会祭り、いじめ見逃しゼロスクール集会、体力テスト、身体測定、縦割り班給食、縦割り班遊び等で縦割り班の活動を取り入れている。

遠足では、縦割り班で協力しながら、学校から悠久山公園の間を往復約 10km 歩いた。下の学年を気遣いながら歩く上学年の姿や、協力して乗り越えることで班の仲を深める姿が見られた。

児童会祭りでは、班ごとに出店を出した。班の仲間と一緒に他の店を回ったり、協力して自分たちの出店を運営したりする姿が見られた。出店では、1 年生から 6 年生まで全員が役割をもち、張り切って活動していた。

どの活動でも、班での活動後に、お互いのよさを伝えあう場を設定した。

③ 一人一人が輝ける場の設定

委員会活動等の児童会活動や、運動会等の学校行事では、一人一人がやりがいをもって主体的に取り組めるよう、職員がサポートしている。

集会委員会主催の「サマーフェスティバル」は、有志による歌や演奏、ダンスなどの出し物を披露する場となっている。子どもたちの新たな一面を垣間見ることができる機会ともなっている。堂々と発表する子ども、発表している仲間に温かい声援を送る子どもの姿が見られた。



④ ネットトラブル・人権等、様々な課題を考える活動の実施

今年度は、長岡警察署生活安全課の職員を講師に迎え、低・中・高学年に分け、ネットトラブルについての講演会を開催した。PTAの講演会では、保護者・教職員・児童向けにインターネット利用アドバイザーの大久保真紀様から具体的な事例をあげた講話をしていただいた。

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

①学級づくり	Hyper-QU 満足群 6月…67.3%⇒11月…70.4%
②縦割り班活動の充実	教員評価（4段階評価）平均値 前期…3.1⇒3.3

教職員の「誰もが居心地のよい学級づくり」への意識が高まったことも、大きな要因である。

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体～「誰もが居心地のよい学級」を意識した授業づくり～

研究推進部とも連携し、全校体制でインクルーシブ教育の視点から「誰もが居心地のよい学級」を意識し、日々の授業をつくってきた。授業の中でも、お互いの思いや考えに耳を傾ける場、互いの意見を尊重しながら折り合いをつける場、誰もが安心して自分の意見を言える場、それぞれの思いを生かして活動できる場等を意識的に設定していくことで、互いを認め合いながら学び合う雰囲気が生まれてきている。落ち着いて学習する姿、学習課題に真摯に向き合う姿、主体的に学ぼうとする姿が多くみられるようになってきた。一人ひとりの考えが大切にされることで、自分の考えを分かってもらおうと相手の立場に立って説明しようとしたり、自分と友達の考えの違いを受け入れ、その理由を聞き合ったりした。対話的な活動のなかで、各教科等における多面的な見方・考え方を身に付けることができたことから、インクルーシブ教育の視点からの「誰もが居心地のよい学級」が大切だと考えられる。



②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

夏季休業中に、生活指導部が中心となり、いじめ等防止のための研修を行った。具体的な事例や資料集の内容を提示し、実際にお互いの経験や考えを話し合う場を設けた。いじめの定義の確実な理解や、子どもの見取り方、実際の対応について考えを深めることができた。

また、教育相談前など機会をとらえ、資料集の中からいじめの早期発見につながる教育相談の充実に関する部分を参考にすることで、その後の教育活動に生かせるようにした。

3 課題

「人と違うこと」が気になる児童もまだ多い。違いに対して寛容な雰囲気を学級・学年・学校で醸成していく必要がある。違いを認め、互いのよさを認めていくことが、一人一人の自己有用感に繋がっていく。教師自身の児童の捉え方や寛容な対応が誰もが居心地のよい雰囲気づくりに大きく関わることから、児童理解を深め、インクルーシブ教育の視点からの学級づくりを進めていく。

学校名 小千谷市立片貝小学校

1 取組の実際

学級や個人の人間関係能力を高めるために、Q-U 調査や特別活動、保小中連携を活用・実施しながら、よりよい学級づくり・人間関係づくりを学校・地域全体で進めてきた。

- (1) 生活期を核にした目標設定や振り返りを学級全体で行い、お互いの成長を認め合った。
- (2) 学級の中で自分の役割や仲間と協力・協働する力を高めるため、係活動・当番活動を充実させ、朝活動など着実に時間を確保した。
- (3) 学校行事や児童会活動に異学年交流を取り入れ、お互いを認め合い、助け合う体験を多く取り入れた。(1 学期：防災・健康ウオーク, 2 学期：ダンスコンテスト, 日々の縦割り班による集会活動, いじめ見逃しゼロ集会など)
- (4) 社会性育成やネットトラブル未然防止のため、片貝地区の保小中で連携しながらあいさつ運動, 1 家庭 1 取組でのメディアコントロールなどを地区全体で進めた。
- (5) 小中児童生徒, 保護者も交えたネットトラブル防止に向けた講演を聞き, 小中の児童生徒で小グループでのファシリテーションを行った。SNS を介した人とのかかわり方や, 生活の乱れにつながらないメディアの活用の仕方を学んだ。

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒, 教職員, 家庭, 地域等にみられる変容）

実施計画において, 成果の検証指標と考えていたトラブルの件数, Q-U 調査, 児童アンケートでの変容は以下の通りである。

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| ①トラブルの件数（市教委への事故報告件数） | H30 5 件 が H31 (R 元) 0 件 |
| ②Q-U 調査：(学級満足群を 65%に) | H30 60% が H31 (R 元) 64.9% |
| (学級生活不満足群を 10%以下に) | H30 17% が H31 (R 元) 9.9% |
| (学習生活意欲全項目を上回る児童 50%) | H30 49% が H31 (R 元) 55.9% |
- ③児童アンケート「みんなで話し合ったり, 協力して学習を進めたりすることは好きですか。」において, 肯定的評価が今年度 90%以上であった。

上記数値の変容より, トラブルの未然防止が図られ, 学級の中で児童の居場所や役割がよりはっきりとしてきて, 仲間と協力して活動していこうとする意識が育ってきたといえる。児童の自己有用感が高まり, 学習意欲への向上も見られてきた。一昨年度と昨年度見られたいじめ事案(ズボン下ろし)は, 今年度起こっていないが, 小さなトラブルは少なからずある。その都度, 職員で組織的に対応・指導するよう心がけている。さらに, Q-U 調査を効果的に活用し, よりよい学級・人間関係づくりができた。

また家庭・地域の連携において, あいさつ運動による社会性育成とメディアに関する 1 家庭 1 取組(例: 接触時間を 30 分減らし, 親子で読書をするなど)を決め, 親子で継続して行った。それによって, 保護者・地域の学校や児童への関心が高まった。地域全体で保小中と連動して子どもを育てる機運が高まっている。

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

◎「ダンスコンテスト」を通した, 社会性育成と自己有用感の向上の取組

昨年度から取り組んでいる縦割り班を活用した児童会活動である。10 グループに分かれて上学年を中心に課題曲の振り付けと隊形作りを考える。今年度は, 非営利活動法人ハロースポーツの方に御指導いただき, 基本ステップやダンスを通した仲間づくりについて教えていただいた。この指導を生かし, 上学年が下学年に自分たちの考えた踊りを一から教えていく。

下学年に分かりやすく教えるにはどうしたらよいか上学年は工夫し、下学年は教えてもらったことができるようになる喜びや、熱心に指導する上学年への憧れを抱く。お互い認め合い、協力し合うことで一体となった踊りが創られていく。その中で、各自が自己有用感を高める姿が多く見られた。

また、発表会当日は自分たちで地域やお世話になっている方々に審査を依頼し、自分たちの踊りを認めてもらうことで、さらにチームとしての高まりが見られた。招待状を書く、会場へ案内する、審査のポイントを伝え審査していただく、審査していただいたことにありがとうを伝えるなど、様々な地域の方とのかかわりが、子どもたちの社会性を育てた。チームで一致団結して踊り、終わった子どもたちの姿は審査員に感動を与え、達成感に満ちていた。ハロースポーツの方からも各チームの技能的向上にお褒めの言葉をいただき、より達成感を深めていた。



②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

◎「分かる授業」・「道徳」を通して行ういじめの未然防止



片貝小学校の今年度の研究主題は「対話を通して考えを深める子」～支持的風土のある学級づくりをベースにして～である。必然性や必要感のある学習問題・課題設定と全員参加の話し合い活動を取り入れた、児童全員が活躍できる授業改善を目指した。中越教育事務所の指導主事を講師に招き、児童の変容や教師の発問、授業形態など様々な視点から分かる授業づくりはどうあるべきか職員全体で研修を行った。最後の授業研究では、「道徳」を行った。「親切・思いやり」を内容項目とした題材を取り上げ、相手の気持ちを意識した行動をしようとする心情を養おうとねらいをもった授業を行った。

ペア学習の中で児童は自分と違う友達の考えに納得したり、考えを変えたりしていく姿が見られた。よりよい授業づくりは、よりよい学級づくりに繋がり、児童の自己有用感を高めることに生かすことができた。

3 課題

よりよい学級づくり、人間関係づくりを目指した本事業の成果は多く見られた。今後の課題といえることは以下のことである。

- (1) 学校全体としては自己有用感の向上が見られるが、児童の実態が違うので、学年によって状況がかなり違う。その学年の実態に応じた成長目標を定めて、担任だけでなく複数の職員で協力、情報交換をしながら手立てを工夫していく必要がある。
- (2) いじめの未然防止には、家庭・地域の協力が不可欠である。気運は高まりつつあるが、スポーツ少年団などでの人間関係トラブルが、学校生活に影響する場合もある。学校・家庭・地域団体でいじめの未然防止に向け共通理解を図る機会を設ける必要がある。
- (3) 異学年交流を取り入れた特別活動が、児童の自己有用感醸成に有効であった。そういった活動が伝統となって、学校の人間関係づくりの中核となっていくよう、より効果的な活動のあり方を模索する。
- (4) 保小中が全て1校体制の片貝地区であるとともに、「まつり」という伝統行事を重んじるこの地域では、同学年集団の絆の深まりを求めている。一生を通じて共に地域を盛り上げていく人づくりの基盤となるよう、地域の方々からも協力を仰ぎながら保・小・中それぞれでどのような人間関係スキルを高めていくべきか検討していく。

短期的な取組では解決できない課題も多くあるが、毎年改善を図りながら取り組んでいきたい。

令和元年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 十日町市立田沢小学校

1 取組の実際

残念ながら友達を傷付ける心無い言動をとる児童がいる。その児童が見せる姿は我々職員の指導を反映したものであり、これまでの指導を根本的に見直そうと議論を重ねてきた。その結果、主体性を発揮し、認め合い高め合う児童を育成することが課題であるとして、共感的な関係づくりや特別活動の充実などに向けて具体策を講じる必要性を共有した。

(1) 職員の力量向上

取り組むこととして、最優先したのは職員の力量向上である。自らの子ども観を見直すために外部講師を招いた学習機会を設定したり、教育書を読んで意見交換を行ったりした。御指導いただいた講師は、上越教育大学准教授 関原真紀様、株式会社ひとまち 吉崎利生様、十日町市立ふれあいの丘支援学校長 小網輝夫様等である。

(2) 授業改善・教育活動の充実

児童の主体性を発揮できる授業づくりや特別活動などの見直しと充実を図った。日頃の授業にホワイトボードミーティングの手法を取り入れ、自分の考えを明確にできるようにするとともに自信をもって学習に参加できるように工夫した。また、共感的な関係づくりの視点からは、元校長の渡邊雅之様から白血病の闘病生活を通して学んだこと児童に伝えてもらう道徳授業「いのちの話」を全学年で実施した。学年を越えた仲間づくりに向けては、株式会社縄跳び道場の渡邊貞稔様から、これまでの体育学習で行ってきた縄跳びの概念を超える多様な跳び方や複数人で力を合わせて跳ぶ心地よさを味わえる技を御指導いただいた。

加えて、昨年度までの文化祭の内容を見直し、大きく変えることに取り組んだ。児童が本当にやりたいと思う活動をいかに仕組むか、そのための文化祭はどうあるべきかを職員で何度も議論した。

(3) 保護者との連携

児童の成長には保護者の協力が不可欠であるが、学校と保護者が子どもについて胸襟を開いて話し合う機会は多いとは言えなかった。そこで、「田沢小の子どもを語る会」という新たな取組を試みた。

このように、児童の健やかな成長を促すために、職員は自らを省み、そして学校と保護者が何をすべきかを真剣に考え続けてきた。

2 成果

(1) 取組による効果

職員は、児童の可能性を信じ、主体性の育成に努める働きかけに徹するという構えの重要性を再認識できた。また、主体性を発揮し、認め合い高め合う児童を育成するというねらいを常に念頭に置きながら教育活動を考えるようになった。

学校と保護者は、「田沢小の子どもを語る会」で子どもの成長を支える、子どもの心を育てるために大人は何を大切にしているのかを語り合うことで、ベクトルをそろえる一助となった。

児童は、教育活動の様々な場面で主体性を生かす経験をすることで、自然と協働や対話が必要となり、友達のよさに気付いたり、これまで意識しなかった自分のよさを認識したりすることができた。

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

「新！ぽぷらまつり」

児童が主体性を発揮したり、話し合いの過程で友達との折り合いを付けたりする経験がもっと必要ではないかと職員で協議し、例年行っていた文化祭（ぽぷら祭り）を大きく変更することにした。児童の「やってみたい」という思いや願いで行事をつくるという大前提を職員で確認し合った。行事の名称も全員が考え、全員が投票して決める、進行などは希望者によるプロジェクトを立ち上げる、同じ学年内にも複数のブースが用意されることとした。お化け屋敷や射的、マッサージや幼児託児所など来校者に楽しんだり喜んだりしてもらえるコーナーや、町探検を再現した劇やグラウンドのポプラの木の歴史を紹介した紙芝居、テント立て体験コーナーなど教科等の学びを生かした様々な発想の企画が見られた。児童は、やりたいことを企画、運営する中で合意形成に向けて意見交換を繰り返し、創意工夫を経験することができた。



「田沢小の子どもを語る会」

子育てについて様々な思いや願い、悩みや困り感をもつ保護者が大勢いることを、PTA各種会合や個別懇談を通じて把握できた。PTA会長をはじめ執行部役員と学校は、子育てについて保護者と職員が語り合う機会が必要との認識を共有し、新たな会を企画した。保護者が集まりやすいよう平日夜だけでなく、週休日にも設定し、希望する保護者と職員が集まった。「子育ては不安がいっぱい。親同士、先生方と情報交換できるすばらしい取組だと思った」「他の参加者からアドバイスをいただいて気持ちが楽になった」など、好意的な感想をいただくことができた。この会での成果を全家庭で共有したいとの思いから、ポスターを作成した。中央には、親子で話し合って記入するための「我が家はこれを大切にします！」という欄を配置した。「家族で何でも話そうね」「笑顔と挨拶いっぱい〇〇家」など、各家庭で意識していきたい内容が記入された。



②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

「いじめ見逃しゼロスクール集会」

「いじめ見逃しゼロ強調月間」の取組の一つとして、6月と11月にいじめ見逃しゼロスクール集会を行った。6月は担当職員がリーフレット「考えよういじめのこと」を使って「何がいじめなのか」を確認した。その後、縦割り班ごとにいじめをしない、見逃さないという自分の決意を發表し合った。11月は児童会主催で子どもの自主性が発揮できるように配慮した。まず、学級の話合いから出されたいじめ見逃しゼロに向けたスローガンを代表委員会で一つにまとめた。全校のスローガンを確かめたり、友達との交流を深めるゲームを楽しんだりした。この他にも、高学年が参加する中学校区いじめ見逃しゼロスクール集会が7、11月の2回行われた。集会への参加の積み重ねにより、いじめは絶対に許されないこと、互いを思いやることの大切さを再確認する機会になった。



3 課題

主体性を発揮し、認め合い高め合う児童を育成しようとする取組の成果は、すぐに数値的な向上として表れることは難しい。実際、学校評価児童アンケートでの心の成長に関する項目を1・2学期末で数値を比較してみても、肯定的評価は80%前後とほぼ横ばいであり、課題も残る。しかし、児童の成長や変容は我々職員が確実に実感している。児童のよい変化を認め、児童にフィードバックしたり、保護者に伝えたりすることが取組を充実させるために重要と考えている。

令和元年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 燕市立燕中学校

1 取組の実際

本校では今年度、1 年を 5 つの教育期に分け、テーマを設定し焦点化した取組で成果の「見える化」を図っている。1 1 月～ 2 月初旬の第 4 教育期では、「生活習慣を見直し改善していこう」をテーマに教職員・生徒会・PTA 組織を連動させた取組で生活習慣の改善や SNS の適正利用を目指した。この取組は、「命」や「人権」を脅かしかねない「いじめ」や「SNS トラブル」の未然防止に寄与するだけでなく、睡眠時間および家庭学習時間の確保とメディア接触時間の削減や SNS の適正使用、ひいてはこれからの社会を生き抜くために必要なタイムマネジメント力の向上につながると考え、各組織が連動して取り組んだ。

以下に、第 4 教育期の重点目標、達成目標、各組織の連動した取組の概要を表で示す。

表 1 教育期の設定と重点項目

教育期	期間	重点目標	達成目標(生徒アンケート)	達成度
1	4 月 ～ 5 月	①進んで交流し新しい仲間をつくろう ②長善タイムの取組を確立しよう	①、②とも 70%以上 ① a 進んで話しかけた b クラスに慣れた c クラス居心地が良い ② 学習習慣が身についた	① a 98% b 90% c 94% ② 94%
2	6 月 ～ 9 月初旬	かかわる力を高め、他の人のよいところを発見しよう	70%以上 ①他の人の活躍(努力やがんばり)に気づき、具体的に伝えることができた	① 99%
3	9 月中旬 ～ 11 月中旬	自分の良さを知り夢の扉を開こう	①、②とも 70%以上 ① あいさつを意識して行った ① (職場体験・上級学校訪問が)自分の良さや特性を知る機会となった	① 84% ② 77%
4	11 月中旬 ～ 1 月	日常生活をふり振り返り改善していこう	①、②とも 70%以上 ① 生活習慣を見つめ直し改善することかできた ② 生徒会の取組を意識し SNS 等について改善することができた	①92% ②96%
5	2 月 ～ 3 月	総まとめを行い学力の定着を図ろう	①、②とも 70%以上 ① 授業に向かう姿勢が具体的に改善できた ② 家庭学習時間が増加した	臨時休校のため、未調査

表 2 各組織の取組関係表(概要)

	校長	情報部	健康安全部	生徒会	PTA	人権教育 同和教育
11 月初旬	全校朝会 目標説明					
11 月中旬				生徒朝会 取組説明		人権強調月間開始 道徳①②
11 月下旬		道徳① 道徳②	養護教諭指導 健康ウイーク		①SNS講演会	いのち・愛・人 権展観覧
12 月初旬			健康ウイーク			人権強調月間終了
12 月中旬			集約	学級討議		
12 月下旬						
1 月初旬						
1 月中旬			健康ウイーク②	生徒総会 ルール提案	生徒会ルール 周知と啓発	
1 月下旬			健康ウイーク② 集約			
2 月初旬	全校朝会 達成度共有					
備考		①ICT支援員 +担任 ②2年塩田准 教授	学区小学校の 「眠育」とリンク	SNS等の使用課 題洗い出し 生徒会ルールの 決定決議	①塩田准教授	①②統一指導 案による同和 教育

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

SNS の使用時間や使用終了時刻について、12 月に行った学級討議前後の生徒意識調査を比較すると、使用時間（平日）について 2 時間以下とした割合が 69%→78%と増加し、5 時間以上が 14%→7%と減少した。使用終了時刻（平日）について 22 時まで終了とした割合が 66%→78%と増加し、0 時までが 19%→10%と減少した。

また、表 1 の達成度にも示したように、あらかじめ設定した第 4 教育期の達成目標を大きくクリアすることができた。これは生徒の SNS 使用に対する意識が向上しただけでなく、行動の改善にもつながったことを示している。

SNS についての講演会に参加した保護者・教職員からは、「ルールだから、と一方的に生徒に守らせる方法だと効果は一時的であることがわかった。」「生徒自身が生活を振り返ったり受け手のことを考えた SNS 使用を考えたりすることが大切。」「子どもが自分なりの個人目標を設定する。親は、子どもが達成に向けて努力している様子を見守って励ましたり賞賛したりすることが良いことがよくわかった。親子で話し合い目標を決めたい。」などの感想が寄せられた。

(2) 特に効果が見られた取組例

① 取組の具体

11 月 25 日（月）に塩田真吾静岡大学教育学部准教授から、「自覚から自律、タイムマネジメントへ」をテーマに 2 年生対象の授業を、「情報化社会とのつき合い方」を演題に保護者・教職員対象の講演会をしていただいた。SNS については教員より生徒の方が進んでいる傾向にあるため、教職員は SNS の適正利用について生徒に指導する必要性は感じているものの、何をどう指導するか不安があり躊躇してしまいがちであった。そこで情報モラル教材「SNS ノート」（テキストはインターネットよりダウンロード可能）を開発するなど、SNS と子どもの関係について研究している塩田准教授から直接授業をしていただく機会を設定した。1 年および 3 年の学級担任は、塩田准教授の授業を直接参観し、後日自クラスで授業を行うことができた点が大変有効だった。

② 「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

p. 26, 27 第 2 章 3 「道徳」を通して（中学校編）の活用。

3 年生の男子から「A さんから、いやなことを言われたりからかわれたりしてつらい」との訴えがあった。担任は事実関係を把握し、A さんに指導する方針でいた。校内いじめ防止対策委員会では、被害生徒が在籍するクラスが 2 学期に入ってから全体の雰囲気が落ち着かず、仲の良い者同士で粗暴な言葉が飛び交っている様子があることが背景にあると判断し、上記資料を活用した道徳授業の実施を促した。

授業後、「親しみを込めたあだ名でも相手が傷ついていることがわかった。」「親しき中にも礼儀あり。」「受け手の気持ちを考えた伝え方が大切。」などの感想があった。クラス全体の雰囲気が落ち着いたことや授業内容に心当たりがあることもあり、A さんは事実を素直に認め内面化を図ることができ、被害生徒への心からの謝罪をすることができた。

3 課題

期間を決め、テーマを絞り、教職員と生徒会が連動しながら組織的に取り組んだことが成果につながり、それを学校全体で共有できたことが次の取組の意欲づけにもなった。

実践を通して実感したことは、「何をしたか」が重要ではなく、生徒たち自身が「自分事と考え行動をどう変えたか」を教職員が見とり、評価し、生徒に返すことがいかに重要か、ということである。

新学習指導要領の準備、勤務時間削減と業務の効率化、生徒の命と人権を守る取組、学力向上、いじめ・不登校の未然防止と迅速対応等、学校が実施すべきことは多々ある。しかし、同時期に「あれもこれも」やろうとしても成果は生まれない。学校マネジメント機能に磨きをかけ、教職員・生徒だけでなく、保護者や地域住民の協力を得ながら、今取り組んでいることを「見える化」し、取り組んだ結果得られた達成度や成果を共有できる学校創りを今後も目指していきたい。

令和元年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 佐渡市立加茂小学校

1 取組の実際

(1) いじめの未然防止に向けた取組の視点

- ・よりよい人間関係の形成を目指す集団づくり
 - ① マインドフルネスを活用した感情のコントロールを児童自身が身に付ける。
 - ② アンガーマネジメントによる自己の感情への気付きと対処方法を身に付ける。
 - ③ 全校児童の縦割り班によるキラキラ班活動をとおして、社会性育成を図る。
 - ④ アサーティブなソーシャルスキルを学級活動の中で身に付ける。

(2) 年間の実践計画

月	主な取組
年間	マインドフルネスを全校朝会や授業開始の最初に取り入れる
4～12	学級活動の時間にアンガーマネジメントについての学習を年間6時間程度（12月までに）取り入れる。
5	キラキラ班活動として全校縦割り班活動を行う。（掃除や行事、児童会活動等）
6	地域ふれあい活動（地域の方々・保護者・児童との交流活動）
7～8	職員研修（マインドフルネス・アンガーマネジメント・ソーシャルスキルについて）
9	全校登山の事前学習や当日 キラキラ班活動（全校縦割り班活動）
10	全校縦割りキラキラ班活動による道徳授業1回目
11	職員研修（いじめ未然防止のためのアンガーマネジメント） 全校縦割りキラキラ班活動による道徳授業2回目 「ネット依存」について（4～6年生児童向け授業）【学級活動の時間】 中学校区合同いじめ見逃しゼロスクール集会
12	職員研修（マインドフルネス・アンガーマネジメント・アサーティブなソーシャルスキルについて）
1	全校キラキラタイムの活動（7～8人ずつの全校縦割り班、25班編制による児童会主催のレクリエーション活動）【昼休みの時間】
2	全校なわとび大会に向けて、クラスの集団づくり
2～3	6年生に感謝する会の企画と準備による集団づくり

2 成果

(1) 取組による効果

- ・アセスメントソフト「アセス」による評価（年間2回3～6年生に実施）
 - 1回目 2学期始（9月）→ 2回目 3学期始（1月）。1回目と2回目を比較すると大きな変化はないものの、学級内分布票の対人的適応の範囲にほとんどの児童が入っている。また、生活満足感、教師サポート、友人サポート、向社会スキル、非侵害的關係、学習的適応の項目とも適応状態がよく、概ね80～90%台に入っているなど、全体的によい傾向が見られた。

- ・行動観察記録による評価では、今年度、いじめについては、積極的認知に努めた結果、認知件数は昨年度より増えたが、すぐに解消し、長期化、複雑化することがなくなった。
- ・全校朝会、全校集会等、5分前に集合完了し、時間より早く開始できている。授業にも集中して取り組む姿がよく見られるようになった。

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

- ・本田恵子教授（早稲田大学）の職員研修（いじめ未然防止のためのアンガーマネジメント）では、いじめのグループダイナミクスについて解説があり、傍観者である児童の指導が大変重要であることについてご指導いただいた。また、1～6年生の授業参観後、児童への対応について具体的指導をしていただいた。昼休みの時間に児童が遊んでいる様子を観察され、その行動を見ながら、「身体接触がある場面では要注意です。」と解説し、「その場合、①『イライラするよね』と共感し、②『傷つけるのはだめだよね』と話をし、③イライラを発散させる方法を教えることが大切です。」と、どのような対応が必要か具体的にご指導いただいた。
- ・「ネット依存」について（4～6年生児童向け授業）新潟市立早通中学校長 小野郁夫先生から授業をしていただいた。児童のその後の振り返りでは、「ネットは嘘が多い。ゲームは依存になるように作られている。操作されないようにゲームの時間を減らすことだけでなく、減らした分を家族との大切な時間に使うように気を付けなければいけない。」と書くなど、大切なことを捉えている児童が多かった。
- ・校長による職員研修（マインドフルネス・アンガーマネジメント・ソーシャルスキルについて）では、アンガーマネジメント等について、ストレスマネジメントとしての深呼吸の仕方から、児童の行動の見立てとその対応の仕方など、実際に役立つ基本的な事項について研修した。
- ・3～6年生の各学級において、アンガーマネジメントについて、年間6時間程度（12月までに）学習した。怒りを爆発させていた児童が、この学習の後に周りの児童からの「落ち着いて」「深呼吸だよ」の声掛けに応じて、暴力で解決する方法を選ばずに、自らクールダウンすることができた。

②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

- ・よりよい人間関係の形成を目指す学級づくり、集団づくりに資料集を活用した。
- ・「分かる授業」を目指した授業研修：「分かる授業」を通して、対話的な学び、自己有用感を促す授業づくりを実施した。各担任が「算数」の授業を1回以上公開し、研究協議会を開催。「分かる授業」について検討してきた。
- ・児童会活動でいじめ見逃しゼロスクール集会を実施した。

3 課題

(1) 職員についての課題

アンガーマネジメントについて、理解と指導ができる人材を育てるために研修会を実施して職員全体のレベルアップをねらってきたが、独り立ちできる人材育成までには至らなかった。人材育成のための計画的、継続的な人材育成が課題である。

(2) 児童についての課題

各学年で、アンガーマネジメントについて取り組んできたことで、落ち着いて集中して授業に取り組むなど、一定の成果を得ることができた。今後、これを維持することが課題である。

令和元年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 聖籠町立亀代小学校

1 取組の実際

(1) よりよい人間関係の形成を目指す集団づくり

にこ班（縦割り班）遊びやにこ班清掃などの定期的な異学年交流や毎月のクラス・ソーシャル・スキルトレーニング（CSS）、年間2回の「いじめ見逃しゼロスクール集会」を実施した。

よりよい人間関係づくりの基盤としてあいさつ運動に年間を通して重点的に取り組み、各学年で行う「あいさつ襷リレー」（年3回）や中学校の生徒や保護者、地域の方と合同で行う「小中合同あいさつ運動」（年2回）、「あいさつUPプロジェクト」（年2回）を実施した。

また、8月に聖籠町の小中学校の教員の合同研修として、新潟薬科大学の橋本定男先生を講師にお迎えし、町全体でいじめを生まないための学級力向上研修会を行った。

(2) ネットトラブル防止、情報モラルの育成

近年問題となっているネットトラブルの未然防止を目的として、7月に「新潟少年サポートセンター」の方を講師に迎え、5、6年生児童を対象にした授業を行った。

また、亀代小学校運営協議会とも連携し、大久保真紀さんを講師に迎え、4年生児童と保護者、こども園と小学校の教職員を対象として「ゲーム・ネットトラブル防止講演会」を実施した。



月	主な取組
5月	あいさつ襷リレー①（各学年） ＊毎月1回CSSタイム、異学年交流「にこにこ班遊び」の実施
6月	いじめ見逃しゼロ集会① あいさつUPプロジェクト ぽかぽかにっこり大作戦①
7月	ネットトラブル防止講演会 児童教育相談
8月	町小中学校合同学級力向上研修会「いじめを生まない学級づくり」
9月	あいさつ襷リレー②
10月	ぽかぽかにっこり大作戦②
11月	いじめ見逃しゼロ集会② あいさつUPプロジェクト 児童教育相談
12月	ゲーム・ネットトラブル防止講演会
1月	あいさつ襷リレー③ ぽかぽかにっこり大作戦③
2月	あいさつUPプロジェクト 児童教育相談

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

①【学校評価の児童アンケートの結果から】

達成目標	7月	12月
「学校が楽しい」と答える児童を85%以上にする。	90.6%	93.1%

自分から「おはよう」や「こんにちは」のあいさつを交わすことができる児童を85%以上にする。	①学校で、自分からあいさつをしている→92.9% ②家庭、地域で、自分からあいさつをしている→90.6%	①学校で、自分からあいさつをしている→92.7% ②家庭、地域で、自分からあいさつをしている→92.7%
「誰にでも優しい言葉を使っている」児童を75%以上にする。	82.6%	82.4%
同じ学年や違う学年の人たちと協力して活動できる児童を85%以上にする。	92%	95.1%

(2) 特に効果が見られた取組例

①取組の具体

「あいさつ襷りレー」、「小中合同あいさつ運動」、「あいさつUPプロジェクト」の実施

学年ごとの「あいさつ襷りレー」や「小中合同あいさつ運動」、「あいさつUPプロジェクト」を実施し、あいさつ運動を推進してきた。

「小中合同あいさつ運動」では、中学校の生徒や保護者、学校運営協議会、学校支援地域本部の方々にも声をかけ、児童の通学時に玄関先に出てもらい、地域全体であいさつ運動を盛り上げてもらった。地域に立って下さる方には、児童が安心して挨拶できるように目印として揃いの黄色い手袋を配布し、それを付けてあいさつ運動に参加してもらった。

6月、11月、2月の「あいさつUPプロジェクト」では、教職員が輪番であいさつを交わしながら児童のあいさつの様子を観察し、特にあいさつのよかった児童を翌月の全校朝会で「ナイスあいさつで賞」として表彰した。子どもたちも「ナイスあいさつで賞」に選ばれることを励みとして、張り切ってあいさつを行っていた。

学級力向上研修会

8月に聖籠町の小中学校の教員の合同研修として、新潟薬科大学の橋本定男先生を講師にお迎えし、学級力向上研修会を行った。橋本先生からは、「いじめを生まない学級づくり」というテーマで、学級集団を育てる原理やいじめを生まない学級づくりの2つのアプローチの仕方（①温かい集団づくり、②強い集団づくり）について、豊富な御経験を基にわかりやすく御指導いただいた。子どもたちへの直接的な指導とともに、教員へのいじめを生まない風土づくりについて学ぶ良い研修の機会となった。

②「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

児童会主催の「いじめ見逃しゼロスクール集会」の実施

6月と12月の2回、児童会総務委員会が中心となり、全校で「いじめ見逃しゼロスクール集会」を行った。お互いに温かい言葉がけを行う「ぼかぼかにっこり大作戦」の取組を学年ごとに紹介し合ったり、縦割り班ごとにふれあいゲームをしたりしながら、お互いの良さを認め合い、いじめをしない、見逃さないという意識を高めることができた。

3 課題

あいさつ運動や異学年交流、「いじめ見逃しゼロスクール集会」等の活動を通して、子どもたちのよりよい人間関係づくり能力を育成することができた。

しかし、感情のコントロールがうまくできない児童や落ち着かない児童に同調する児童もいて、安定した状態に至っていない学級、学年もある。

また、ネットゲームやSNSに関連したトラブルも最近になって多くなってきた。

今後も、学校、家庭、地域と連携しながら、子どもたちのより良い人間関係づくり能力の育成に努めるとともに、ネットトラブルを含めたいじめの未然防止に取り組んでいく。

1 取組の実際

(1) いじめ未然防止の取組

①主体的・対話的な学びを通して、深い学びの実現を目指す生徒の育成

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通して、生徒の自尊感情と自己有用感を醸成することで、いじめの未然防止に努めている。また、授業規律を生徒と共有することで、いじめを生まない環境、いじめを許さない雰囲気を育んでいる。

②考え、議論する道德の実践

「自分ならどうするか」という観点から問い掛け、自分自身のこととして、多面的・多角的に考え、議論していく「考え、議論する道德」を推進している。そして、多様な価値観と誠実に向き合い、いじめ問題に対して考え続ける姿勢を身に付け、一人一人が自分自身の問題と捉え向き合うことができるよう授業実践に努めている。

③異学年交流活動の推進

各種行事において、生徒が主体的に取り組む中で、上級生が下級生と関わり合い、お互いを認め合い、励まし合う場を設定している。また、「いじめ見逃しゼロスクール集会」では、異学年で構成する小グループで話し合う場を設け、多様な価値観や考え方に向き合うことができるよう工夫している。

(2) いじめ早期発見の取組

いじめに関するアンケートの実施

日頃から、些細な兆候を見逃さないよう、生徒の見守りや観察に努めている。また、毎月、いじめに関するアンケートを実施し、本人からの訴えだけでなく、他の生徒からの情報なども記入できるよう工夫し、いじめの早期発見に努めている。

2 成果

(1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

生徒アンケートにおける生徒の肯定的な回答をした割合

項 目	7 月	11 月
いじめは、いじめられる人に原因はないと思いますか。	73%	75%
いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか。	96%	97%
あなたは、いじめられている人がいたら助けてあげたいと思いますか。	96%	97%

生徒のいじめに対する意識に関するアンケートの項目において、数値が上昇した。しかし、「いじめは、いじめられる人に原因はないと思いますか」の項目で25%の生徒が否定的な回答をしている。このことは、生徒は一般論として、「いじめはいけない」ことは理解しているが、個別具体的な事例において、原因があれば、いじめられてもしょうがないという認識をもつ生徒が一定数存在していることを示している。

(2) 特に効果が見られた取組例

① 取組の具体

I 「考え、議論する道德」への質的転換に向けて

生徒に自分自身のこととしての関与を促すために、互いに価値が対立する状況設定を工夫した上で、「自分ならどうするか」と問い、初発の立場の明確化を図る。さらに、対立する二つの立場で想定される最良の結果と最悪の結果を考えさせる。

生徒は他の生徒との学び合いの中で、Aの立場を取った場合の最良と最悪、Bの立場を取った場合の最良と最悪の結果という四つの場合を考えることになる。このようにして、様々な立場から考えさせることで、いじめについても被害、加害、傍観、無関心のような多くの立場が存在し、それぞれの立場で解決を目指すことが必要であることへの気づきを

促す。

Ⅱ 目指す生徒の姿

「考え、議論する道徳」を通して、「納得解を見いだす」や「折り合いを付ける」などの経験を積み重ねることで、他者の考えにも素直に耳を傾け、自分自身の問題と捉え、よりよい解決策を考える生徒を育成する。

Ⅲ 授業実践（主題名：「友達のことをよく考えて」 資料名：「ぜったい ひみつ」）

ア 具体的な手立てと生徒の変容

- ・手立て1：資料を読み終え、「主人公が転校する友達にお別れ会のことを言うべきか、言うべきではないか」と投げかけた。

生徒の考え：『一人で悲しみ、かわいそうなので、友達にお別れ会のことを言う。』

- ・手立て2：状況を俯瞰してとらえさせるために、言う場合と言わない場合について良い結果と悪い結果を整理し、比較させた。そして、「自分が主人公ならどうするか」と投げかけた。

生徒の考え：『あえて別の会だと言って、ごまかす。』

- ・手立て3：将来、他者、公平の視点から、全員がハッピーエンドを迎えるための主人公の取るべき行動が何であるかを考えさせ、自分と異なる意見や多様な考えに触れさせ、よりよい判断ができるよう議論させた。そして、振り返りの場面で「この先、自分が主人公のように迷ったらどうしていきたいか」と投げかけた。

生徒の考え：『自分なら、友達にお別れ会のことは言わない。しかし、友達が悲しまないようにすることが大切。声をかける、手紙などでさみしい思いをさせないなどの行動をとっていく。クラスで話し合う。』

イ 変容した生徒の姿

手立て1では、「転校する友人」または「クラスの仲間」のどちらかのことしか考えることができなかったが、手立て2で、主体的に自分との関わりで考え、手立て3で、多様な考え方、感じ方と出会い交流したことで、友達を大切にすることや周りとの調和について深く考え、他者を思いやる気持ちが高まった。

② 「新潟県いじめ等防止のための資料集」を活用した取組事例

I いじめの早期発見の取組「いじめに関するアンケート」の実施

ア アンケート項目

- ・特定の生徒だけの記入とならないよう、「ある」、「ない」の選択式とする。
- ・生徒が、学級担任以外の教員にも相談できるよう選ばせる。
『相談したい先生を○で囲んでください。（○は何個つけてもよい）』を追加した。

イ 実施方法

- ・原則、毎月の第3週月曜日に実施する。欠席等の未実施者も翌週までに実施する。
- ・アンケートの回収は、各自が封筒に入れて、学級担任が個別に回収する。

3 課題

生徒は、いじめはどんな理由があってもいけないことだという一般的な認識はもっている。そして、いじめられている人がいたら助けてあげたいという意欲もある。しかし、それがどのような場合でも成り立つという普遍的な行為には至っていない。これは、いじめの定義の理解と様々な場面・立場からいじめの事例を考えることによる判断力の醸成が十分でないことが原因である。

今後の取組として、いじめの定義の理解と様々な場面で多面的・多角的に考える経験の両面を意識した実践を積み重ねていきたい。